

論文審査の結果の要旨および担当者

報告番号	※ 甲 第	号
------	-------	---

氏 名 秦 勤

論 文 題 目

Queer Film Festivals in East Asia: The Metropolis, LGBTQ Activism, and Community Building

(東アジアにおけるクィア映画祭：都市、LGBTQ アクティヴィズム、コミュニティ形成)

論文審査担当者

主査	名古屋大学 教授	藤木 秀朗
委員	名古屋大学 教授	佐々木 重洋
委員	名古屋大学 准教授	馬 然
委員	同志社大学 准教授	菅野 優香

論文審査の結果の要旨

〔本論文の概要〕

本論文は、東アジアの都市で開催されてきたクイア映画祭がどのように企画・実施され、どのような社会的な意義をもってきたかを論じたものである。香港、東京、北京におけるクイア映画祭を中心的な事例としながら、各映画祭がそれぞれのローカルな文脈との兼ね合いで独自の展開を見せつつ、同時にいくつかの映画祭同士の間に関連が生まれてきたことを論証している。

本論文は5章から成っている。第1章では、クイア映画祭としては東アジアで初期の1989年に開始された **The Hong Kong Lesbian and Gay Film Festival/香港同志映画祭** を考察し、当初、異性愛的な規範への対抗と **LGBTQ** のコミュニティ形成を狙う草の根的な活動として始まった本映画祭が、ディレクターが交替し、上映会場をアートセンターから商業的な施設へと移転していく中で、その政治的な意味合いを喪失してきた経緯を明らかにしている。第2章では、1992年と1993年に行われた東京レズビアン&ゲイ映画祭を分析し、それが当時の会場となった渋谷パルコの消費文化の興隆とそこで打ち出された新しいアート感覚に結びつけられることで、クイアに関する映画が最先端のファッションの一つとして受け止められ、とりわけ若い女性の間で人気を博した状況を検証している。第3章では、1992年に東京国際レズビアン&ゲイ映画祭として始まり、2016年にレインボー・リール東京と改称したクイア映画祭を取り上げ、それが中野サンプラザ、吉祥寺バウスシアター、表参道のスパイラルホールへと会場を移転させてきた歴史的経緯において、多様なセクシュアル・マイノリティの人たちが自分たちの居場所を確保・拡大し、同時にまたそれ以外の人たちとも交流する場を築き上げてきた状況を明らかにしている。第4章では、2001年の北京大学図書館での上映会をきっかけに始まり、以後、今日に至るまでの間に、異性愛以外のセクシュアリティのあり方に対する規制と検閲が厳しい中で、その上映会場を大学、北京郊外の施設、列車、外国大使館などへと移転させながら、いわばゲリラ的に開催されてきた **The Beijing Queer Film Festival/北京同志映画祭** を考察の対象に据え、インディペンダント映画文化と北京の知識人たちに支えられたこのクイア映画祭が支配的な異性愛体制に対する抵抗と「同志」の居場所を提供してきた経緯を論じている。そして第5章では、中国語で使用されるようになった「酷儿」と日本語で使用されるようになった「クイア」の意味合いの違いを比較検討しつつ、その一方で、台湾国際クイア映画祭で企画されたアジア・太平洋クイア映画祭同盟のプログラムを例に、国境を超えた東アジア圏のクイア映画祭とその関係者、参加者とのコミュニティ形成の可能性を論じている。

結論では、東アジアのクイア映画祭が各都市のそれぞれの文脈と分かち難く結びついてきたこと、それゆえに多様な展開を見せてきたこと、しかしそれらの社会的なインパクトは総じて限定的なものにとどまっている傾向にあることを指摘している。

論文審査の結果の要旨

〔本論文の評価〕

過去 10 年間に盛んになってきたクイア映画祭研究の最大の特徴は、映画祭、クイア、地域という 3 つの大きな問題系が複雑に交差する、すぐれて現代的な事象の特徴と問題を、フィールドワークと言説分析を通じて明らかにしようとするところにある。本論文は、こうした特徴をもつクイア映画祭研究の方法と成果を批判的に継承しつつ、とりわけ次の 3 点で新しい知見を示しているものとして評価できる。

第 1 に、東アジアのクイア映画祭に関する従来の研究が前提としがちであった西洋対アジアといった二項対立を脱することに成功している。クイア映画祭研究は、欧米の LGBT 映画祭を対象とする研究に始まり、それに対抗する形で東アジアの同種の映画祭が論じられる傾向にあった。これに対して、本論文は、各映画祭が開催されてきたそれぞれの都市のローカルな文脈との関係を検証することを重視し、それによって西洋対アジアといった二項対立には当てはまらない、東アジアにおけるクイア映画祭の多様な展開を浮かび上がらせている。第 2 に本論文は、一つの国における映画祭、一つの都市における映画祭の事例に焦点を絞る研究が多い中で、東アジアという広い地域を視野に収めた見解を示している点で評価できる。香港、東京、北京を事例にしている点で決して網羅的な研究とは言えないものの、この地域の各都市の文脈の違いに応じた多様性と複雑さを示すものとなっている。そして第 3 に本論文は、クイア映画祭として総称されるものが、各都市の政治体制、歴史的な文脈、ディレクター、上映会場、プログラム、観客などとの関係で、それぞれ固有の課題を抱え、それゆえにある程度多様な社会的な意味合いを持つものであることを明らかにしている。そうした調査分析により、クイア映画祭が単にセクシュアル・マイノリティの承認を求めようとするものではなく、むしろ異性愛的な支配体制に抵抗するものであったり、コミュニティを形成しようとするものであったり、消費文化とアートを融合させるものであったり、LGBTQ のアイデンティティを超えた社会的交流を促進するものであったりというように、単一ではない形で展開されてきたことがわかる。

とはいえ、本論文にも問題がないわけではない。例えば、用語の定義が曖昧でその使用法が混乱しているところがある。元来「クイア」という用語にはアイデンティティ・ポリティクスに対抗する意味合いがあるにも関わらず、それが踏まえられていないために、アイデンティティ自体の問い直し、アイデンティティの社会的構築性、言説上におけるアイデンティティの本質化のせめぎ合いを十分に分析できているとはいえない。また、コミュニティ形成を明らかにするにはフィールドワークが不十分だという点も否定できない。とはいえ、こうした問題は今後の課題として十分に克服していくことが期待できるものであり、本論文の価値を損なうものではない。

以上により、審査委員一同、本論文が博士（文学）の学位を授与するにふさわしいものと判断した。